興福寺

第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅶ

2016

興　福　寺

西室北辺調査区（Ⅱ区）全景（西から）　奥に大房北端の礎石、手前に中近世遺構群がみえる

北円堂院北面回廊調査区（Ⅲ区）全景（南西から）　手前に北面回廊の基壇外装が残る

北円堂院内庭部調査区（Ⅳ区）全景（北から）　調査区中央の玉石が入る小穴が燈籠基礎据付穴

序

興福寺は和銅３年（710）の草創で、去る平成22年（2010）、創建1300年を迎えた。当山では、この年の前後各10年つまり20年間を「興福寺創建1300年記念事業期間」と位置づけ、「天平の文化空間の再構成」を合言葉に、いわゆる第１期境内整備事業を鋭意進行中である。

本事業の最重要課題は、享保２年（1717）に焼失した中金堂の再建で、現在、平成30年（2018）秋の落慶を目前に、最終工程に入っている。

こうした中金堂の再建後ひきつづき、北円堂院の南門とそれに取り付く回廊を可能な限り復原する予定で、これらが整えば、興福寺の境内も、かつての雑然とした寺観をそうとう修正できるのではないかと考えている。

もとより、当山の境内整備は、この他にも行なうべき項目が多い。中金堂と北円堂に近い僧房や経蔵・鐘楼なども、その基壇表示が望まれるが、本書は、そのなか、西室および北円堂院（承前）の発掘調査の概報である。調査に当たられた奈良文化財研究所の各位に、謝意を表する次第である。

平成28年３月

興福寺貫首　多 川 俊 映

目　次

序
目　次
1　調査経過　3
2　西室と北円堂院の歴史　4
（1）西室の歴史と既往の調査　4
（2）北円堂院の歴史と既往の調査　6
3　遺　構　7
（1）調査前の地形および基盤層と整地　7
（2）西室とその周辺の遺構　7
（3）北円堂院の遺構　18
4　出土遺物　21
（1）土器・陶磁器　21
（2）瓦磚類・土管　25
（3）金属製品・銭貨　28
（4）冶金関連遺物　29
（5）石製品　29
（6）動物遺存体　30
5　結　語　31
（1）西室の調査成果　31
（2）北円堂院の調査成果　33
報告書抄録　34

例　言

1．本書は興福寺第1期境内整備事業にともなう2013・2014年度発掘調査概要報告書である。
2．調査は興福寺の委託を受けた独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部（平城地区）が、2013年6月3日から10月9日まで、および2014年9月29日から2015年1月16日まで実施した。
3．調査は、小池伸彦・渡辺晃宏・箱崎和久・神野 恵・石田由紀子・番 光・芝 康次郎・山本祥隆・川畑 純・前川 歩・松下通生が担当し、加藤 瑛（奈良大学卒業生）、江上 輝・間所克仁・宮本博喜（奈良大学）、大久保芳紀（奈良大学大学院）、石崎健斗（東京大学大学院）、髙尾美由紀（横浜国立大学大学院）が参加した。
4．調査にあたっては、文化庁、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会の協力を得た。
5．本調査は、都城発掘調査部（平城地区）の平城第516次調査および第540次調査として実施したもので、各遺構には平城京左京における調査基準にしたがい一連の番号を付した。発掘遺構図の座標値は、世界測地系（平面直角座標系第Ⅵ系）による。
6．本書の作成は、当調査部副部長・渡辺晃宏の指導のもと調査員全員があたり、全体の討議を経ておこなった。編集は、芝康次郎が担当し、各項は調査担当者が執筆を分担した。なお、4（6）は当研究所埋蔵文化財センター研究員の山崎 健が執筆した。執筆者名は執筆箇所の末尾に示す。
7．遺構・遺物の写真は、中村一郎・栗山雅夫・杉本和樹・鎌倉 綾が撮影した。
8．2013・2014年度発掘調査の概要は、すでに『奈良文化財研究所紀要2014』および『奈良文化財研究所紀要2015』にて報告している。本書は両報告を改めて検討した成果を示しており、これが現段階での正式な見解である。

1　調査経過

今回の調査は、興福寺西室と北円堂院を対象とした。

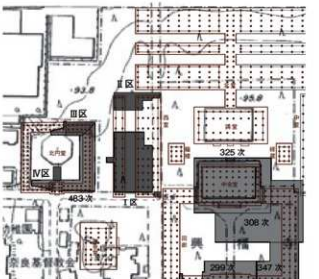
興福寺では「興福寺境内整備基本構想」（1998年）に基づき、寺観の復元・整備を進めている。この整備事業にともない、奈良文化財研究所（以下、奈文研）では、1998 年以来、中金堂院、南大門、北円堂院等の発掘調査を継続しておこなっている。この事業の一環として、2013・2014年度には西室（西僧房）および北円堂院において２度の調査を実施した。本報告は、これらの概要報告である。

発掘調査以前の西室跡には、大房のものと推定される建物の礎石が一部露出していた。2013年度調査では、西室の南半部を対象とした。調査の過程で、北円堂院との間の遺構の様相を確認するために西に拡張区を、西室基壇の東南隅の様相を確認するため東に拡張区を設けた。調査面積は計985㎡である。調査は2013 年６月３日に開始し10月９日に終了した。本書ではこの調査区をⅠ区とする。調査では、西室大房の建物や基壇の規模にかかわる情報を得たほか、大房の西に隣接する掘立柱建物の存在が明らかとなった。

2014年度の調査は、調査区を３つに分けて実施した（第１図）。本書では、これらをⅡ、Ⅲ、Ⅳ区とする。Ⅱ区は西室北辺部、Ⅲ区は北円堂院北面回廊の一部、そしてⅣ区は北円堂院南面内庭部である。Ⅱ区では、2013年度調査をふまえて、西室の桁行規模の確定を目的とした。北円堂院では、2011年度調査（平城第483次）の補足調査をおこなった。Ⅲ区は北面回廊未調査部分の様相把握、Ⅳ区は北円堂前面の燈籠や参道の痕跡の有無の確認を調査目的とした。調査面積は、Ⅱ区が269㎡、Ⅲ区が138㎡、Ⅳ区が44㎡である。調査は2014年９月29日に開始し2015年１月16日に終了した。Ⅱ区の調査では、西室大房の桁行（南北）の基壇規模が確定し、Ⅰ区で検出した掘立柱建物の北端も確認した。Ⅲ区では、2011年度の調査成果を追認し、Ⅳ区では、内庭部での燈籠の存在が明らかとなった。　（芝康次郎）

第１表　調査経過

2013年	
６月３日	Ⅰ区、重機掘削開始。（～６月24日）
６月22日	Ⅰ区、遺構検出開始。
８月１日	Ⅰ区、西拡張区重機掘削。
８月23日	Ⅰ区、ハイライダーによる全景写真・地上写真撮影
８月28日	Ⅰ区、クレーン垂直写真撮影。実測作業開始。
９月４日	Ⅰ区、断割調査開始。
９月11日	現場検討会。
９月26日	記者発表。
９月28日	現地見学会（855人の参加をみる）
10月８日	現場検討会
10月９日	Ⅰ区、砂撒き。撤収。
2014年	
９月29日	Ⅱ区、重機掘削開始。（～９月30日）
10月１日	Ⅲ区、重機掘削開始。（～10月７日）
10月２日	Ⅲ区、北面回廊地覆石を再検出。
10月14日	Ⅲ区、近世・近代土坑群の掘り下げ。
10月24日	Ⅲ区、全景写真および細部写真の撮影。
10月27日	Ⅲ区、実測作業開始。
10月28日	Ⅱ区、人力掘削開始。
10月30日	Ⅲ区、西南隅の基壇断割で地山を確認。
11月５日	Ⅱ区、中近世遺構群の掘削を開始。
11月11日	Ⅱ区、全景写真および細部写真の撮影。
	Ⅲ区、断割部写真撮影。
11月12日	Ⅱ区、実測作業（～11月13日）
11月17日	Ⅳ区、重機掘削。
11月20日	Ⅱ区、方形土坑SK10630の貼床下に土器敷を確認。
11月28日	Ⅱ～Ⅳ区、全景・細部写真撮影。
12月２日	Ⅳ区、実測作業。
12月４日	Ⅱ区、東方に拡張区設ける。
12月18日	Ⅱ区、ハイライダーによる全景写真・地上写真撮影。
12月19日	Ⅱ・Ⅳ区、図面作業終了。
2015年	
１月16日	Ⅱ区、図面作業全て終了。砂撒き。撤収。



第１図　発掘調査図位置図　1：2500

2　西室と北円堂院の歴史

（1）西室の歴史と既往の調査

寺院の存立のために、所属する僧侶の存在は不可欠な構成要素である。したがって、僧侶たちが居住し日常生活を送る僧房も、寺院にとって欠かせない施設と位置づけられよう。僧房は一般に、桁行の長い建物の内部を細かく仕切り、多くの小部屋を設ける構造を特徴とする。

興福寺では、中金堂および講堂の西・北・東各面をコの字型に取り囲むように僧房を配置していた。このような形態を三面僧房と称し、特に興福寺ではそれぞれを西室・北室・中室と呼び習わしている。このうち、西室と中室は梁行が大きな大房の外側に梁行の小さな小子房が柱筋を揃えて並立する構造で、北室は南から上階僧房・小子房・下階僧房の３棟が並列していたとされる。なお、東面の僧房については、創建当初は東僧房などと称されていたものの、平安時代に食堂の東側に新たな僧房（＝東室）が建立されて以降、中室と呼ばれるようになったとされる（初見は平城京跡出土のいわゆる告知札〔『平城宮発掘調査出土木簡概報』７、８頁〕）。

創　建　西室（および中室）について、『興福寺流記』（以下、『流記』）は

東西僧房二間〈各高一丈六尺六寸、廣四丈五尺。寶字記云、二丈。長十一間、々別一丈九尺。寶字記云、廿丈二尺〉

小子房二間〈各高一丈二尺、廣一丈五尺、長同大房。寶字記同之〉

と記している。これは天平年間に成立した興福寺の資財帳のひとつと考えられる「天平十六年記」を引用した記述であり、大房・小子房とも、天平年間以前に完成していたことは確実といえる。

一方、『流記』の別の箇所では「三面僧房」について「本願之御時所造立也」と記しており、これに信を置けば、西室の創建は「本願」＝藤原不比等が死去した養老４年（720）８月以前に遡ることとなる。現実問題としても、興福寺ほどの大寺院が僧房がない状態で長く機能していたとは考えにくい。西室（を含む三面僧房）は、興福寺の創建からそれほど時を経ずして完成したとみて大過ないであろう。

焼失と再建　1300年におよぶ歴史のなかで、興福寺は失火・放火や落雷、兵乱などによる火災に見舞われること屢々であった。わけても西室は、都合８度も焼失の憂き目に遭い、またその度に再建されてきた（第２表）。このうち、永承元年（1046）の火災（２度目）や治承４年（1180）のいわゆる平重衡の南都焼討による焼亡（５度目）、また享保２年（1717）の火災（８度目）などは、興福寺伽藍のほぼ全域におよぶ大規模な罹災である。一方、元慶２年（878）の火災（１度目）など、西室ないし近隣の堂宇のみが害を被ったと目される、やや

第２表　興福寺西室略年表

和暦	西暦	内容	出火原因	典拠史料
720前後		創建		『興福寺流記』
元慶２	878	焼失①	失火	『日本三代実録』
元慶５	881	再建		『日本三代実録』
永承１	1046	焼失②	西里民家への放火から延焼	『造興福寺記』『扶桑略記』ほか
永承３	1048	再建		『造興福寺記』『扶桑略記』
康平３	1060	焼失③	中金堂からの失火	『康平記』『扶桑略記』『三会定一記』
治暦３	1067	再建		『興福寺流記』
永長１	1096	焼失④	北室（上階僧房）からの失火	『中右記』『後二条師通記』ほか
嘉承２	1107	上棟		『中右記』
治承４	1180	焼失⑤	平重衡の南都焼討	『玉葉』
1200前後		再建		『春日大社文書』16
建治３	1277	焼失⑥	他の堂舎への落雷からの火災	『興福寺略年代記』ほか
弘安７	1284	再建		『三会定一記』
嘉暦２	1327	焼失⑦	寺内紛争に基づく放火から延焼	『大乗院日記目録』ほか
嘉吉２頃	1442頃	再建		『大乗院日記目録』
享保２	1717	焼失⑧	講堂からの失火	『南都年代記』

参考文献
太田博太郎『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店、1979
藪中五百樹「奈良時代に於ける興福寺の造営と瓦」『南都仏教』64、1990
藪中五百樹「平安時代に於ける興福寺の造営と瓦」『仏教芸術』194、1991
藪中五百樹「鎌倉時代に於ける興福寺の造営と瓦（上）」『仏教芸術』237、2001
藪中五百樹「南北朝・室町時代に於ける興福寺の造営と瓦」『立命館大学考古学論集』3、2003
藪中五百樹「安土桃山・江戸時代に於ける興福寺の造営と瓦」『帝塚山大学考古学研究所紀要報告』6、2005

小規模なケースもある。

８度もの焼亡を経験した理由のひとつに、伽藍内での西室の立地が挙げられよう（第１図）。東面を中金堂院および講堂、南面を西金堂、西面を北円堂院、北面を北室に囲まれる西室は、他の堂舎からの延焼を受けることも多かった。また、興福寺伽藍の東限が平城京の京極たる東七坊大路にあたるのに対し西側には街区が展開していたこと、さらに西室自体が僧侶たちの居住空間として火気と無縁ではなかったことなども、罹災回数増加の一因として指摘できるかもしれない。

廃　絶　西室が最終的に焼亡・廃絶したのは、享保２年（1717）の火災においてである。

ただし、小子房のみはこれ以前に、大房に先立ち廃絶していたらしい。ここでは特に、宝永５年（1708）作製の「興福寺伽藍春日社境内絵図」（第２図）に注目したい。本図では、前年（宝永４年、1707）10月の地震で中金堂院の西面回廊が転倒したことを受け、当該箇所については建物を描かず、基壇線を示すかのごとく墨線のみが引かれている。作製時の現況をありのままに描写する姿勢がみられる本図の内容に、一定の写実性や正確性を認めることは許されよう。そして、本図の西室部分には大房のみが描かれ、小子房の姿は認められないのである。詳しい時期等は不明とせざるを得ないが、少なくとも本図が描かれた宝永５年（1708）の時点で、小子房はすでに廃絶していたと見なすのが妥当であろう。

既往の調査　西室は、享保の火災ののちは再建されず、現在は地表に露出する礎石などからわずかに往時の姿が偲ばれるのみである。

一方、西室の建物規模の復元に関わる調査・研究も存する。ここでは、大岡實による案（『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966）と鈴木嘉吉による案（『奈良時代僧房の研究』奈文研、1957）を紹介したい。大房の梁行方向については両案とも４間、総長45尺とし、またこれは『流記』所引「天平十六年記」の記述と合致する。対して、桁行方向に関しては両者が見解を異にする。大岡案は桁行９間の22.5尺等間（総長202.5尺）とし、北室との規則性を重視した案となっているのに対し、鈴木案は桁行11間のうち北６間を22.5尺、南５間を15尺（総長210尺）と復元する。なお、前者は『流記』所引『寶字記』の記す数値（「廿丈二尺」）に、後者は同「天平十六年記」の示す値（「長十一間、々別一丈九尺」、11×19＝209尺）に近似する。

西室を含む僧房にかかる発掘調査も幾度かおこなわれている。昭和30年（1955）のガス管理設工事にともなう調査では、西室大房の東・南・北各面で基壇外装（凝灰岩製の地覆石および羽目石）が確認された（『奈良時代僧房の研究』〔前掲〕）。また、翌年に実施された食堂の発掘調査に際しても、中室小子房の東・南両面で基壇外装（凝灰岩製の地覆石・羽目石および葛石）を確認し、その外周に石敷きを検出している（『興福寺食堂発掘調査報告』奈文研、1959）。ただし、これらはトレンチによる部分的な調査であり、本格的な発掘調査は今回が初めてとなる。

第２図　興福寺伽藍春日社境内絵図（部分、興福寺蔵）

（2）北円堂院の歴史と既往の調査

北円堂院は、八角円堂の北円堂とそれを取り囲む単廊の回廊からなる。北円堂院の歴史や回廊部分を中心とする発掘調査成果などについては、本概報シリーズのⅥ（以下、『概報Ⅵ』）で報告されている。そのため、ここではその概略を述べるとともに、同書刊行後におこなわれた発掘調査を紹介する。

創　建　『流記』によれば、北円堂院は藤原不比等の供養のために元明太上天皇・元正天皇が長屋王に命じて造営を開始し、一周忌にあたる養老５年（721）８月３日に完成したとされる。また、堂内には弥勒仏像以下９体の尊像が安置され、堂のまわりを「廉廊」（＝回廊）がめぐり、それに「南門」が付設されていたことなども記されている。なお、前年10月に設置された「造興福寺仏殿司」（『続日本紀』）については、この北円堂院の造営を担う官司と解するのが通説である。

焼失と再建　永承元年（1046）12月、興福寺は伽藍の大部分を焼失するほどの大規模な火災に見舞われたものの、この際は幸運にも北円堂院には火の手が及ばなかった。だが、同４年２月、北円堂院は唐院・伝法院とともに焼亡の憂き目を見ることとなる（『扶桑略記』）。その後の再建は約半世紀後、寛治６年（1092）まで遅れた。しかしながら、同年正月19日の再建供養には関白藤原師実以下多くの公卿が参会し、盛大に執りおこなわれたという（『扶桑略記』『中右記』『為房卿記』など）。また、この時の記録からは、北円堂本体のみでなく回廊も再建されたことが確認できる。

治承４年（1180）12月、平重衡の南都焼討で興福寺は灰燼に帰し、北円堂院も２度目の焼亡を迎えた。翌養和元年（1181）６月には造興福寺行事長官の任命がおこなわれるなど復興体制は迅速に整えられてゆくが、北円堂院の再建は一連の復興事業の末期に位置づけられ、完成は承元４年（1210）頃と目される（承元四年具注暦裏書など）。一方、その後は北円堂は大きな災禍に遭うこともなく、この鎌倉時代初期の堂舎が現在に伝えられ、興福寺では最も古い建造物のひとつとなっている。ただし、この時は回廊の完成を示す明証が諸史料に認められず、後述の2011年度調査では、回廊については再建は成らなかったとみるべきとの見解が提示されている（詳細は『概報Ⅵ』参照）。

既往の調査　北円堂院については、戦後を中心に、発掘調査も幾度かおこなわれている。まず1962～1965年の北円堂解体修理にともない北円堂基壇の地下部分が調査され（奈良県文化財保存事務所編『重要文化財興福寺大湯屋・国宝同北円堂修理工事報告書』1965）、つづいて1975・1977年には防災施設工事にともない回廊部分が調査された（興福寺編『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』1978）。とりわけ後者の調査では回廊基壇や礎石・基壇外装（凝灰岩製の地覆石・羽目石）等が確認されており、今回検出した北面回廊の基壇外装もこれを再確認したものである。

さらに、2011年には、第Ⅰ期境内整備事業にともなう発掘調査の一環として、南面・東面回廊および北面回廊の一部が本格的に調査された（『概報Ⅵ』）。これにより回廊各面の柱間配置の復元案が示され、今回の調査対象である北面回廊については、北門にともなう中央間（13尺）および東西両隅間（それぞれ11尺）以外の計12間は約9.6尺等間で割り付けられたとの見解が提示されている。

加えて、近年の境内防災設備工事にともない、2014年度に北円堂院内庭部の一部が調査された（芝康次郎ほか『興福寺境内の調査―第540次・541次・第2013-32次』『奈良文化財研究所紀要2015』、2015）。それによると、北円堂以東では標高94.8m程で地山面を確認したのに対し、以西では標高93.5mほどまで掘り下げても造成土が厚く堆積し、地山は確認されなかったという。これは、次頁で言及する北円堂院周辺の基盤層や造成の様相についての知見を補強するデータといえる。（山本祥隆）

3　遺　構

（1）調査前の地形および基盤層と整地

調査前の地形　調査地には、カシやマツなど多数の樹木が見られたが、調査にともない伐採した。また、地表面には西室大房の礎石の一部が露出していた。この付近の地形は、礎石露出部分ではおおむね平坦で、そこから北西方向に向かってやや標高を下げる。設定した調査区（1・Ⅱ区）の東端は、興福寺境内の参道に面し、西室大房の東側柱筋想定位置は参道の路面にあたる。

基盤層と整地　調査区の基本層序は、上から表土、暗褐色ないし褐色砂質土（土師器片を多く含む）、そして、基盤層の明黄褐色粘土あるいは黄褐色砂礫土である。基盤層にはチャート等の円礫ないし亜円礫を多く含む。基盤層の標高は、Ⅰ・Ⅱ区ともに東方に露出する西室大房の礎石付近では95.2～95.3mと平坦で、西室大房の西側柱筋の西２～３mに展開する数条の南北溝（土管暗渠）群を境に、西方に向かって緩やかに標高を下げ、調査区西方の標高は約94.7mとなる。北円堂院東面回廊付近の基盤層の標高は約94.7mであり（2011年度調査所見）、今回のⅠ・Ⅱ区西端から西は一度平坦になることがわかる。そして北円堂院北面回廊の東部付近（Y=－15,574）を境に標高約93.2mまで大きく落ち込む。南面回廊の南門想定位置以西でも同様の落ち込みが認められ、さらに北円堂の西方でおこなった2014年度の防災設備工事では、標高93.5mでも基盤層は確認できていない。したがって、この基盤層は、北円堂院の中央付近を境に西方に向かって急激に落ち込んでいたと考えられる（第３図）。

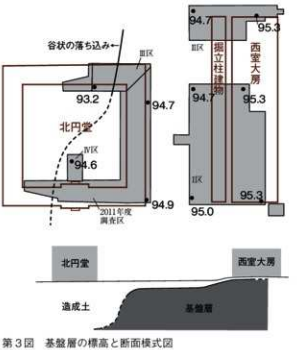
西室から北円堂院の中央付近までの遺構検出面は、基本的に基盤層上面である。ただし、西室大房の西方では、基盤層の上に暗褐色ないし褐色砂質土が認められ、この上面で複数の遺構を検出した。これらの遺構の埋土には中世の土師器片を含むことから、それ以後の整地と考えられる。また、基盤層が大きく落ち込む北円堂院の西方では、基盤層の上に、造成土である暗褐色粘土を複数層重ねたのちに、黄褐色粘質土と砂質土を互層とした版築土を積む。

（2）西室とその周辺の遺構

ⅰ．西室に関わる遺構

西室大房SB10450　桁行10間、梁行４間の南北棟礎石建物で、北端の桁行１間半分と、南方の桁行７間分を検出した（第６図）。建物規模は、南北約62.5m（212尺）、東西約12.4m（42尺）で、柱間寸法は、桁行が南端２間分のみ約4.8m（16尺）、そのほかは約6.6m（22.5尺）、梁行は中央２間が約3.2m（11尺）、両脇間は約3.0m（10尺）である（基準尺はこれまでの調査成果に倣い１尺＝0.295mとする）。桁行方向の親柱礎石間には間柱礎石を２基ずつ配し、それぞれの柱間は約2.2m（7.5尺）である。

親柱礎石は三笠山産安山岩や花崗岩の自然石である。安山岩の礎石は、長軸90～115㎝、短



第３図　基盤層の標高と断面模式図

軸70～85㎝、成60～70㎝程度で、柱座などの造り出しはない。上面が赤変しているものもあり、被熱痕跡と考えられる。礎石据付穴は径1.3～1.5m程度の隅丸方形ないし楕円形で、深さは検出面から30㎝程度である（第４図）。東入側柱筋（ロ列）の礎石は、現参道の造成により後世に若干西方へ動かされているが、そのほかの残存している安山岩の礎石には据え替えの痕跡はなく、遺物の出土もないことから、創建当初の位置を保っていると考えられる。花崗岩の１石（ハ十一）は、礎石の下方に古い礎石の抜取穴と据付穴が認められる。後世の据え替えと考えられるが、抜取穴、据付穴の埋土から遺物は出土せず、据え替えの時期は不明である。この礎石の大きさは、長軸80㎝、短軸65㎝、成20㎝で安山岩の礎石よりも薄く、やや小さい。礎石が失われている箇所では、据付穴、抜取穴を検出した。「ハ一」、「ホ二」の礎石抜取穴には多量の瓦や拳大の礫などを含み（第５図）、「イ十一」の抜取穴には凝灰岩の切石が捨てこまれていた。また、「ニ七」礎石は、抜き取られてはいないものの、礎石下に瓦が差し込まれており、礎石を浮かせて抜き取ろうとした痕跡の可能性もある。

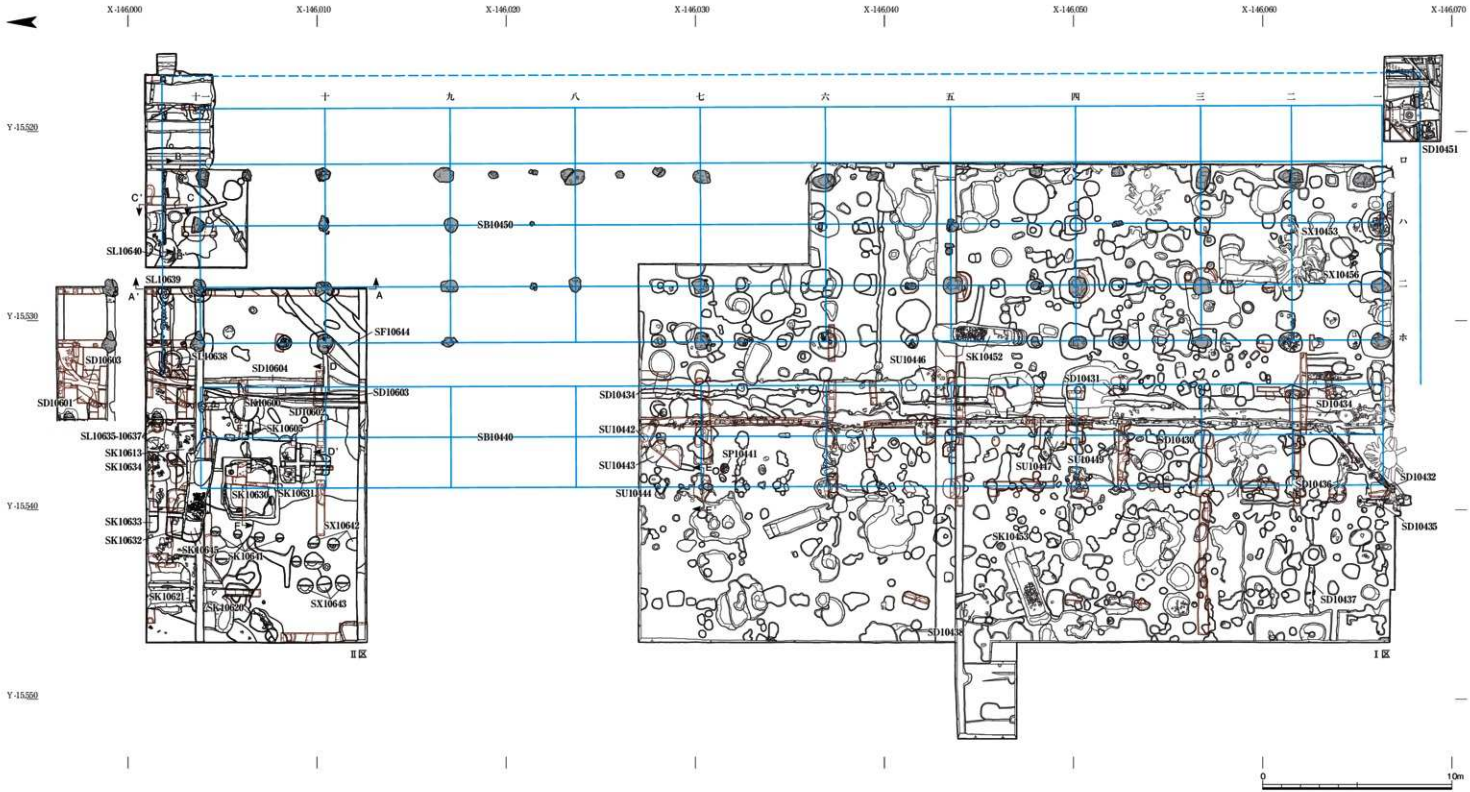
間柱の礎石は一部が残存していたが、失われているものも多く、抜取穴や据付穴のみを検出したものもある。これは礎石が小型であることや据付穴が浅いことに起因している。残存礎石の大きさは径50～60㎝程度、成25㎝。礎石据付穴は径70㎝、深さは検出面から10㎝程度。間柱の据付穴からも遺物の出土はない。断割調査をおこなった「ニ五」北側の礎石、「ホ十」北側の礎石は、創建時の位置を保っている。「二七」北側の礎石は石を２段に積んでおり、高さ調整の痕跡と考えられる。

基　壇　西室大房SB10450の基壇は、砂礫を含む明黄褐色粘土からなる地山削り出しで造られている。基壇南方では上面にわずかに積み土が認められる。基壇外装は、北面と東南隅でのみ確認し、東南隅では雨落溝も検出した。いっぽう、基壇西面と東面の北端部では、基壇外装や雨落溝などの痕跡は、後世の遺構による削平などにより確認できなかった。大房北妻と南妻の礎石心から地覆石外面までの距離は約1.9m（6.5尺）である。東面の基壇の出は、東南隅の羽目石と「イ一」礎石抜取穴の位置から、南北両面と同様に約1.9mと推定される。基壇北面および南面の地覆石の外面間距離は約66.5m（225尺）で、南北の基壇規模が確定した。東西の規模は現状では明らかにしえない。礎石上面の標高は約95.5m、基壇外装地覆石上端の標高が約95.0m であり、基壇上面と礎石上面との比高を約10㎝と仮定すると、基壇高は約40㎝に復元できる。

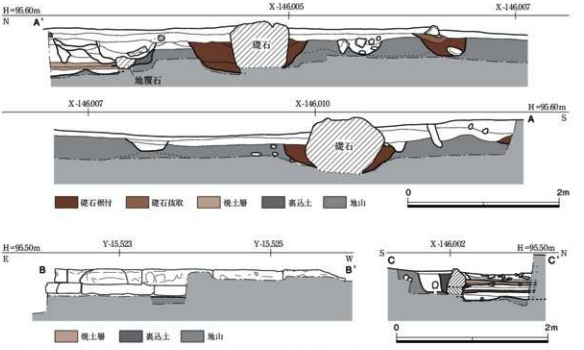
基壇外装は、北面・東南隅とも地覆石と羽目石を確認した。石材は、すべて二上山産凝灰岩である。基壇北面では、地覆石６石、羽目石５石を確認した。地覆石は幅20～25㎝、高さ約15㎝、長さは完存するもので93㎝。羽目石は幅15～17㎝で、高さは20㎝、長さは完存するもので94～96㎝。北面で

第４図　二五礎石据付穴断ち割り（南から）

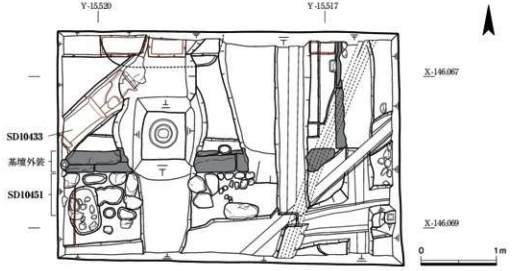
第５図　ハ一礎石抜取穴（南西から）



第6図　西室調査区（Ⅰ・Ⅱ区）遺構平面図　1：200（左端はⅡ区北端の下層遺構を示す）



第７図　基壇北端土層図（A-A'・C-C'）および北面基壇外装立面図（B-B'）　1：50



第８図　基壇東南隅（東拡張区）平面図　1：50

第９図　北面の基壇外装（北東から）

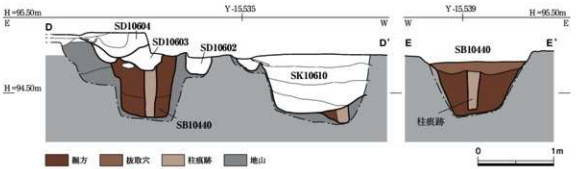
第10図　東南隅の基壇外装（南西から）

両者が見られたのは礎石ハ列より東方で、羽目石が地覆石よりも基壇の外に傾く（第７・９図）。いっぽう、礎石ハ列より西方では、地覆石のみが残存し、地覆石上面には羽目石をのせる仕口部分を残す。地覆石は、少なくともハ列より西では瓦片を含む整地土上面に据えられており、正確な時期は不明だが後世に据え替えた可能性が高い。ただし、地覆石の据え付け痕跡は１つのみであり（第７図）、その位置は当初の位置を踏襲していたと考えられる。基壇東南隅では、地覆石および羽目石の一部が残存していた（第８・10図）。南面は比較的残りが良いが、東面は後世の削平を受けて地覆石・羽目石とも外側を大きく削られていた。地覆石は計６石が残り、幅30～34㎝、高さ10～15㎝、長さは残存長で80㎝。上面には、羽目石をのせる仕口をもち、露出部分は石組溝と同じ高さまで削られている。羽目石はすべて後世の遺構により破損するが、幅17㎝、高さ15㎝、長さ69㎝が残る。また、地覆石・羽目石の内側にこれらの据付掘方を検出した。据付掘方は幅52㎝、深さは検出面から22㎝である。

石組溝SD10451　基壇東南隅では地覆石に接して石組溝を検出した（第８・10図）。西室大房SB10450の雨落溝と考えられる。南面には溝外側の側石が１石のみ残存しており、地覆石から側石までの幅は、内法で40㎝、深さ10㎝。約20㎝の扁平な安山岩礫を２列並べ底石とするが、一部抜き取られている。部分的に径10 ～ 15㎝の礫を敷き詰めた部分がある。

掘立柱建物SB10440　大房SB10450の西側柱筋の約2.5m西方付近には数条の南北溝群があり、この溝理土を除去して南北棟掘立柱建物の東側柱筋の柱穴を検出した（第６図）。桁行10間、梁行２間で、大房と梁行方向の柱筋を揃える。建物規模は、桁行が大房と同じ約62.5m（212尺）、梁行は約5.2m（17尺）に復元できる。柱間寸法は、桁行は大房と同じく南端２間が約4.8m（16尺）、以北が約6.6m（22.5尺）であり、梁行はやや短く約2.6m（8.5尺）等間である。また、桁行方向の親柱間を三等分する位置（大房の間柱と柱筋を揃える）に小型の柱掘方を検出した。これらは、間柱または床束の痕跡と考えられる。親柱の柱穴は、Ⅰ区では樹根で確認が困難な棟通り南端の１基を除いてすべて確認し、Ⅱ区では東側柱２基と棟通りの柱穴の２基（底面のみ）を確認した（第12図左）。その他の柱穴は後世の土坑群により削平を受け、確認できなかった。親柱の柱穴掘方は一辺0.8～1.2mで、深さは検出面から約0.8～1.0mである。親柱の柱穴には柱痕跡が残り、柱径は約20㎝である（第11図）。いずれの掘方から

第11図　SB10440柱穴の断面（E-E'：南から）



第12図　SB10440柱穴断割土層図（左：D-D'、右：E-E'）　1：50

も遺物は出土していない。一部の柱穴では、掘方の上位に抜取穴と考えられる厚さ20㎝程度の埋土がみられた（第12図右）。これは掘立柱建物廃絶後に、新たに据え付けられた礎石の抜取穴である可能性も否定できない。間柱の柱穴掘方は大きさ、平面形状、深さともに不揃いだが、およそ１辺50～80㎝で、深さは検出面から約40㎝である。この建物の東側柱筋と、大房SB10450の西側柱筋との間の距離は、心心で約2.5mである。掘方埋土に遺物を含まないため創建時期は不明だが、掘方埋土が基盤層由来の礫混じり黄褐色砂質土であるなど、SB10450の礎石据付穴の埋土と類似しており、創建は古代まで遡る可能性が高い。廃絶は、柱穴を壊す土坑SK10605が土器の年代観から、平安時代中頃が下限となる。この建物は、西室大房と南北規模が同規模で柱筋を揃えるため、小子房の可能性はあるが、大房との距離が約2.5mと近接しており、確定できない。この問題について第５章で改めて検討する。

このSB10440の基壇の積み土や地覆石等の基壇外装、雨落溝は、その痕跡を含めて確認できなかった。この建物周辺には後述する南北溝群や後世の土坑群があり、これらに削平されている可能性もある。

ⅱ．土管暗渠・素掘溝群

土管暗渠SD10435～10438　SD10435～10437はⅠ区西南部で検出した土管暗渠。SD10435 は南北方向の暗渠で長さ約８m、SD10436・10437 は東西方向の暗渠でそれぞれ長さ約４mと約６m分を検出した。SD10436 は西端が、SD10437 は東端がSD10435と接続する。削平により大半の土管が失われているが、幅40㎝程度、深さ20㎝程度の素掘溝に瓦質土管を据え、その上に平瓦をのせる。SD10435は凝灰岩を用いて補強されている。SD10435・10436は、後述のSD10432 に壊されている。SD10438はⅠ区西端で検出した東西方向の土管暗渠。長さ0.8m分が残存する。SD10435・10436・10438には行基式の丸瓦円筒土管が使用されており、一連の暗渠になる可能性がある。

土管暗渠SD10430　Ⅰ区中央を南北に縦断する土管暗渠（第13図）。長さ40m以上でⅠ区調査区外の南北に延びる。Ⅰ区南部では斜行する土管暗渠SD10432と接続する。幅40㎝程度、深さ25㎝程度の素掘溝に瓦質土管を設置し、その上に平瓦または丸瓦をのせて暗渠とする。土管の繋ぎ口の方向が異なる箇所があること、土管の繋ぎ口の形状が２種類あること、土管の傾斜の方向が場所により異なることなどから、これらは後世の改修部分と考えられる。この土管の下層から平瓦・丸瓦を並べた深さ20㎝の溝が検出されたところもある。土管は、14～16世紀の玉縁式、ソケット式土管である。

第13図　土管暗渠SD10430・10432 検出状況（北から）

土管暗渠SD10431　SD10430の約１m東側で検出した南北方向の土管暗渠。SD10430同様、素掘溝に瓦質土管を設置する。幅40㎝、深さ20㎝、長さ17m。南北両端はゆるやかに西へ曲がり、SD10430に接続する。

土管暗渠SD10432　Ⅰ区南端で検出した北東－南西方向の暗渠。長さ約5.8m分を検出した。北端はSD10430と接続し、南端で東西方向に折れる。幅40㎝、深さ25㎝の素掘溝に瓦質土管を設置し、上に平瓦または丸瓦をのせる。SD10430との接続部分ではSD10430の土管の一部を壊して取り付け

ている（第13図）。南端はSD10435 を補強する凝灰岩ごと壊して設置されている。掘立柱建物SB10440の西南隅の柱穴を壊す。

南北溝SD10434　Ⅰ区中央を南北に縦断する素掘溝。幅70㎝、深さ30㎝程度で、長さ40m以上。Ⅰ区の南側では土管暗渠SD10430のすぐ東に位置し、その据付掘方を壊す。Ⅰ区中央付近で東に約2.4mクランクし、北へ延びる。

Ⅰ区の土管暗渠群および素掘溝は、重複関係からSD10435～10438が最も古い。これらは土管の型式から平安時代以前に位置付けられる。後出するSD10430～10432は掘立柱建物SB10440の廃絶後、土管の型式から14世紀中頃に埋設され、16世紀にも改修されたと考えられる。SD10434はこれらよりも新しく、近世に位置付けらる。

南北溝SD10601～10604　Ⅱ区西室大房において、大房SB10450の西方２～３mで南北溝を４条検出した。SD10601は瓦暗渠で、Ⅱ区北端付近で東に斜行する。約３m分を検出した。それ以外は素掘溝である。幅約40～50㎝、深さ20～40㎝で、いずれも南流する。このうちSD10601が最も古く、次いでSD10602、SD10603と続き、SD10604が最も新しい。その年代は限定しにくいが、SD10601は、掘立柱建物SB10440より新しく、後述の円形土坑SK10600よりも古いことから、平安時代中頃～鎌倉時代に位置付けられる。またSD10602～10604は、SK10600よりも新しく後述の鎧群よりも古いことから、室町時代～江戸時代前半の間のいずれかの時期に収まると考えられる。これらの南北溝は、いずれも西室大房の西北隅付近で基壇に沿って折れないため、地覆石の抜取穴や据付穴とは考えにくい。SB10440廃絶後にSB10450の雨落溝や排水溝等として機能していた可能性がある。

ⅲ．廃棄土坑群および土器溜

小土坑SP10441　Ⅰ区西北部で検出した小土坑。径50㎝、深さ約35㎝。内部からは丸瓦、径約15㎝の礫とともに、平安時代初頭の須恵器杯、鉢、双耳壺が出土した。

土器溜SU10442～10444　Ⅰ区の北端で検出した３基の浅い土坑。いずれも大きさは長径1.4m程度、深さ20㎝程度。埋土から多量の土師器が出土しており、まとめて廃棄したものとみられる（第14図）。出土した土器の年代は、SU 10442・10443 が13 世紀中頃、SU10444 が室町時代に属する。

土器溜SU10446・10447　Ⅰ区中央付近で検出した不整形な浅い土坑。SU10446は南北2.2m、東西1.6m。埋土から完形を含む土器が出土した。先述のSD10434より古く、SB10440の間柱柱穴より新しい。出土土器の年代は13世紀前半とみられる。SU10447は、東西1.2m、深さ10～20㎝。この土坑の底面で

第14図　土器溜SU10442・10443・10444（南東から）

第15図　円形土坑SK10600 内の土器廃棄状況（北から）

SB10440の柱穴を検出した。埋土には13世紀から室町時代の土器を含む。

円形土坑SK10600　Ⅱ区中央で検出した、径約1.2m、深さ約2.5mのほぼ正円形の土坑。埋土は大きく複数の単位に分けられ、検出面より50㎝下から底面までの約２ｍの間に、数枚の砂層を挟んで、14世紀前半に位置付けられる赤土器を多量に含む（第15図）。土坑の底面には平瓦を数枚敷く。井戸の可能性もあるが湧水はなく、廃棄土坑として利用されたと考えられる。

土坑群SK10605～10625　Ⅱ区の南北溝群SD10601～10604よりも西方には、土器や瓦を多量に含む廃棄土坑群が展開する。大きいもので径10m以上、深さ1.5m以上、小さいもので径40㎝前後と多様である。Ⅱ区中央では土器の廃棄土坑が多く、西方では瓦の廃棄土坑が多い。また、SK10610とSK10622は調査区西南部の一帯に広がる土坑あるいは整地で、深さは両者とも1.5m以上ある（第６・12図）。土坑は複雑に重複し、平安時代から江戸時代にかけて掘削が断続的に繰り返されていたようである。Ⅱ区西部のSK10619やSK10620では、奈良時代から平安時代の瓦や土器が出土した。また、Ⅱ区中央部の廃棄土坑SK10605は、出土土器から平安時代中頃に位置づけられる。これらが最も古い土坑群である。後者は掘立柱建物SB10440の柱穴を壊しており、これより新しい。その他の土坑で年代が分かるものには、SK10613（17世紀前半）があり、この土坑からは、「びしゃもん」「文珠」「地蔵」などの墨書を有する土器が出土した（23頁で後述）。

ⅳ．冶金関連遺構

SK10453　Ⅰ区東南隅付近の西室大房基壇上で検出した（第16図）。２基が上下に重複しており、いずれも後世の礎石抜取穴により、北半が破壊されている。平面形は楕円形ないし不整な隅丸長方形を呈し、上部土坑は検出状態で、東西径約30㎝、南北径約25㎝、深さ15㎝。下部土坑は大きく破壊を受けているが、上部と同規模とみられる。いずれも底部から側壁にかけて、被熱還元硬化面が認められた。埋土から鋳型片、銅滓などの鋳銅関係遺物と、褐色鉄滓片、鍛造剥片、粒状滓などの鉄鍛冶関連遺物が出土した。鉄滓は被熱硬化粘土に密着した状態で出土しており、鉄鍛冶炉の可能性が高い。下部土坑からも同様の遺物が出土しており、同様の機能を有していたと考えられる（小池伸彦「興福寺西室出土冶金関連遺構・遺物の再検討」『奈文研紀要2015』、2015）。SK10453の土坑埋土からは中世の土器が出土したが、明確に近世以降の土器等は認められなかった。

SK10456　SK10453の西方約10㎝の位置で、長径約40㎝の不整楕円形を呈する被熱灰褐色還元硬化粘土面と、その東側外縁に同心円状に広がる幅約20㎝の被熱橙赤変色面を検出した（第16図）。甑炉の可能性もあるが詳細は不明である。

Ⅰ区南部では中世のある時期に鉄鍛冶や鋳銅など金属生産がおこなわれており、造寺あるいは改修に関わって設置された工房が存在していた可能性が高い。（小池伸彦「興福寺西室出土冶金関連遺構・遺物の再検討」〔前掲〕）。

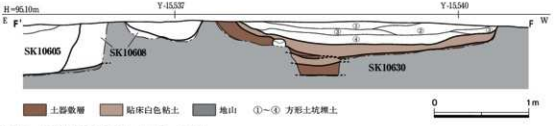
第16図　鉄鍛冶遺構SK10453・10456 平面図　1：30

ⅴ．Ⅱ区近世遺構群

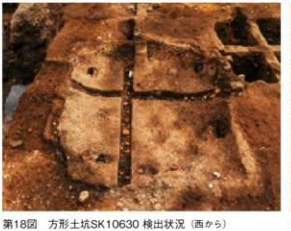
方形土坑SK10630～10633　Ⅱ区で方形土坑を４基検出した。SK10633はⅡ区北端にあり、さら

に北に続く。その南のSK10632は後述の長方形土坑SK10645に壊されているため、部分的な検出にとどまる。両土坑とも一辺1.8m前後の方形で、深さ約30cm。

SK10630は、一辺2.6m前後のほぼ正方形で、深さは約40cm。形態は竪穴建物状で、白色粘土の貼床をもつ。平面と床面の重複から少なくとも2度の改修がある。詳細に調査した最も新しいものでは、貼床とその下の多量の土師器を重ねて埋めた土器敷きを確認し、貼床面を掘り込む小穴を4基確認した（第18・19図）。小穴はいずれも径15cm前後、深さ10cmほどで柱穴かどうか判然としない。貼床と土器敷きは2時期分が重なる（第17図）。上層の貼床は厚さ10cm前後、土器敷きは厚さ5cm前後で、下



第17図　方形土坑SK10630 土層図　1：40



第18図　方形土坑SK10630 検出状況（西から）

第19図　方形土坑SK10630 貼床下土器敷検出状況

第20図　Ⅱ区北端近世遺構群検出状況（北から）

層の貼床は厚さ15㎝、土器敷きは厚さ10～15㎝前後である。土器敷きに含まれる土器の年代は、いずれも17世紀後半から18世紀前半までである。この年代観によると、SK10630の構築は、西室大房焼失の年代（1717年）より遡る可能性があり、大房と併存していた可能性がある。

SK10631は長軸約2.1m、短軸約1.9mで深さ約0.9m。これらの方形土坑からは、土器が比較的多く出土するのみであり、出土遺物から機能は推定しがたい。ただし、一辺1.8～2.6mという規模や、明らかに床面を意識したSK10630の貼床の構築状況から、貯蔵施設等の機能をもつ施設と考えられるが、形態が少しずつ異なっておりそれぞれ別個の性格を有していた可能性もある。

土師器廃棄土坑SK10634　Ⅱ区北端で検出した径約1.5m、深さ30㎝程度の円形土坑。完形の土師器が多量に出土した（第20図）。廃棄土坑と考えられる。土師器は18世紀中頃のものと考えられる。

竈SL10635～10640　Ⅱ区北端付近に６基確認した。これらは西室大房SB10450の基壇外装を壊して造られており、大房廃絶後の遺構である。平面形状が長軸70～90㎝、短軸50～70㎝の小楕円形で、一端が開く。この開いた部分が焚口と考えられる。底面には木炭片が広がり、側壁は被熱により赤化する。ただし側壁の立ち上がりは、後世にほとんど削平されている。形態的には大きく次の２つに分かれる。すなわち、竈SL10635・10636の２つは、２基が一連となり、平面形状がメガネ状になる。もう１つは、SL10638～10640のように１基単独のものである。両者は焚口と煙り出しの方向が異なり、前者ではその方向が西→東のものと南→北のものがあるのに対して、後者では西→東のみである。前者の２連の竈では双方が重複しており、その前後関係は南北方向から東西方向となる。

埋甕土坑群SX10641～10643　Ⅱ区西南部で計11基の土坑を検出し（１基はⅡ区南壁にかかる）、３基から４基を１単位として南北に並ぶ。土坑の大きさは、径50～80㎝、深さ30～50㎝で、うち２基から陶質の甕が出土し１点はほぼ完形であった。これらは、水甕群あるいは便所の可能性がある。

近世道路SF10644　Ⅱ区の東端部に北東―南西方向の斜行溝２条と、これに挟まれる小礫敷面を検出した。これは「奈良町絵図」（19世紀前半）などの資料から北円堂への参道と考えられ、2011年度におこなった北円堂院の調査で確認したSF9975に接続する可能性がある。

ｖ．近代以降の遺構

長方形土坑SK10452・10453・10645　調査区の各所に認められる深さ１ｍ以上の長方形土坑。SK10452と10453はⅠ区で検出された。長軸約4.5～５ｍ、短軸約1.2ｍ、深さ約1.2ｍ。SK10452は南北方向を（第21図）、SK10453は北東―南西方向を向く。SK10645はⅡ区の中央やや北寄りで検出した。長軸約5.5m、短軸約1.1m、深さ約1.2mで、長軸が北西―南東方向を向く。

これらの土坑の短軸は、緩やかな傾斜で立ち上がり、斜面を階段状に成形する。また、底面に瓦片を敷くことで共通する。出土遺物にガラス瓶など近現代の遺物を含む。太平洋戦争時の防空壕と考えられる。

（芝・香　光）

第21図　長方形土坑SK10452検出状況（北から）

（3）北円堂院の遺構

i．北円堂院に関わる遺構

北面回廊SC9955　存在を想定していた８基の礎石抜取穴のうち、検出したものは南側柱の２基（SP10660・SP10661）である（第23図）。南側柱の残り２基は、巨大なカシ樹根下あるいはその近傍にあり、検出できなかった。また、北側柱の全ての礎石は、後述する近世以降の土坑群に壊され、確認できなかった。調査前に樹根付近に見えていた安山岩巨礫は、ほぼ礎石想定位置にはあるものの、後世に動かされた痕跡が認められた（第26図）。検出した抜取穴の平面形は、ほぼ円形で径60×80㎝程度、深さは検出面から約20㎝。抜取穴からは瓦片が少量出土した。２基の柱間寸法は、『概報Ⅵ』の想定どおり9.6尺と推定できる。

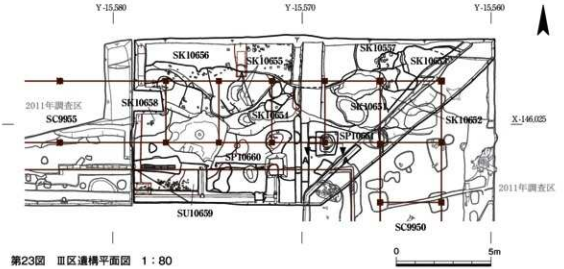
基　壇　基壇の築成方法は、Ⅲ区の東西で異なる。東半では、基本的に基盤層の礫混じり明黄褐色土を削り出して造る。一方、西半ではこの基盤層が西方に向かって急激に標高を下げる。この基盤層上に、褐色土や暗褐色土などを比較的厚く積む（約1.1ｍ）。その後、少なくとも地覆石よりも約１ｍ外側まで版築を施し、地覆石を据えたのち基壇の高まり部分に版築をおこなう（第22・24図）。基壇部分の版築は、黄褐色粘土と黄褐色砂質土を５㎝ほどの厚さで互層に積む。後述する近世以降の土坑群によって基壇北半は完全に壊されている。

基壇外装は北面回廊基壇南面の一部で、地覆石と羽目石を確認した（第25・27図）。これは1975・76年の境内防災設備工事にともなう発掘調査で確認していたもので、今回は再検出となる。地覆石は５石、羽目石は１石が残り、地覆石はそれぞれ幅30～50㎝、奥行15～20㎝、成12～15㎝、羽目石は幅48㎝、奥行12㎝、成18㎝である。いずれも地獄谷産凝灰岩の切石を用いる。これらの切石が残っていない部分では、抜取溝を確認した。しかし、地覆石の破片らしき凝灰岩片が残存する箇所では、据付痕跡を確認できなかった。これは、基壇造成の過程で据付溝などを掘らずに地覆石を据えたためと考えられる。

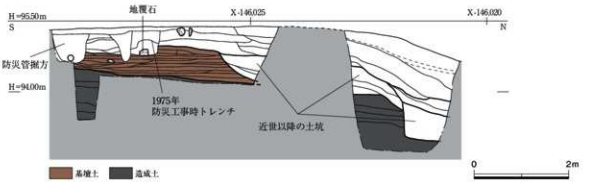
瓦溜SU10659　Ⅲ区西南部、基壇外装より南側で検出した。基壇土の上層を切り込み、径３ｍの範囲に瓦片がまばらに広がる。中世の土師器や瓦器を含む。

第22図　Ⅲ区西壁南端断割土層断面（東から）

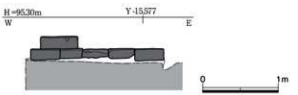
燈籠基礎据付穴SP10671～10673　Ⅳ区において北円堂南面に３基検出した（第29図）。SP10671は南面階段の中軸ライン上にほぼのり、階段最下段の踏石南端から約3.2ｍ、北円堂基壇地覆石外面から約4.6ｍの位置で検出した。またその他の２基は、SP10671と東西軸を揃え、SP10671から西に約2.5ｍの位置でSP10672を、東に約2.1ｍの位置でSP10673を検出した。位置と大きさから、いずれも燈籠の据付穴と考えられる。SP10671は径60㎝×90㎝、深さ25㎝（第30図）、SP10672は径60㎝、深さ20㎝である（第31図）。SP10673は、正確な大きさは分からないが、SP10672とほぼ同規模と考えられる。３つの据付穴には径５～10㎝前後の円礫（花崗岩、チャート、流紋岩）が充



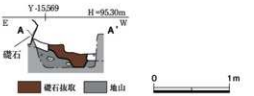
第23図　Ⅲ区遺構平面図　1：80



第24図　Ⅲ区西壁土層図　1：80



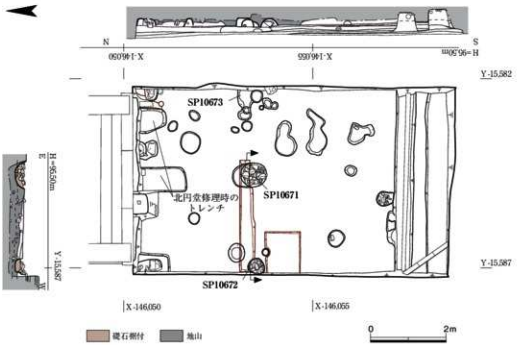
第25図　Ⅲ区基壇外装立面図　1：50



第26図　Ⅲ区礎石断割土層図　1：50

第27図　Ⅲ区基壇外装検出状況（南東から）

第28図　Ⅲ区近世・近代土坑検出状況（北東から）



第29図　Ⅳ区遺構平面図　1：100

第30図　SP10671検出状況（北西から）

第31図　SP10672検出状況（東から）

填されており、SP10671からは奈良時代後半の須恵器坏が出土した。基礎据付穴３基は大きさに違いが認められるものの、埋土や検出面に共通している。現状では同時併存かどうか検証できない。

その他、調査区北辺には、北円堂正面の仮設屋根のもと考えられる礎石が東西に４基並び、そのやや南に北円堂の1952～1955年修理時の足場と考えられる掘立柱穴が認められる。

ii．その他の遺構

近世・近代の土坑群SK10651～10658　Ⅲ区北辺に大小10基の土坑を検出した（第24・28図）。大きなものは、調査区の幅を超え、深さは約２mに達し、小さなものは１m前後、深さ50㎝程度で、これらが重複して掘られている。これらには多量の土器と瓦を含まれる。遺物からこれらの土坑のほとんどは近世以降のものと考えられる。特に、土坑SK10651からは、19世紀第３四半期に位置付けられる多数の陶磁器類のほか、瓦、鉄釘などの金属製品、貝殻など食物残滓が出土した。この上面には、大正11年（1922）の銭貨を含む造成土（黒色土）がのる。（芝）

4　出土遺物

（1）土器・陶磁器

i．西室およびその周辺の土器・陶磁器

Ⅰ区からは、古代の須恵器・緑釉陶器なども若干出土しているが、全域で鎌倉時代から室町時代にかけての土師器皿が大量に出土した。胎土が橙褐色を呈する鎌倉時代の土師器皿の多くが全体の形状をとどめているのに対して、赤褐色や灰白色を呈する室町時代の土師器皿は、ほとんどが破片化している。

Ⅱ区では、整理用コンテナに約80箱の土器・陶磁器が出土した。平安・鎌倉時代にまで遡る遺物も少数認められるが、多くは江戸時代のもので、特に土師器皿が目立つ。以下、主な遺構からの出土品について記す。

小土坑SP10441　須恵器の杯A（第32図1）・鉢（2）・双耳瓶（3）がある。土師器供膳具をともなわないため、時期を細かく絞り込むことは難しいものの、1・3は奈良時代前半から半ばの操業と目されている加茂古窯跡群の西槻窯跡出土品に類品があり、2とともに8世紀代のものと見なして差し支えない。

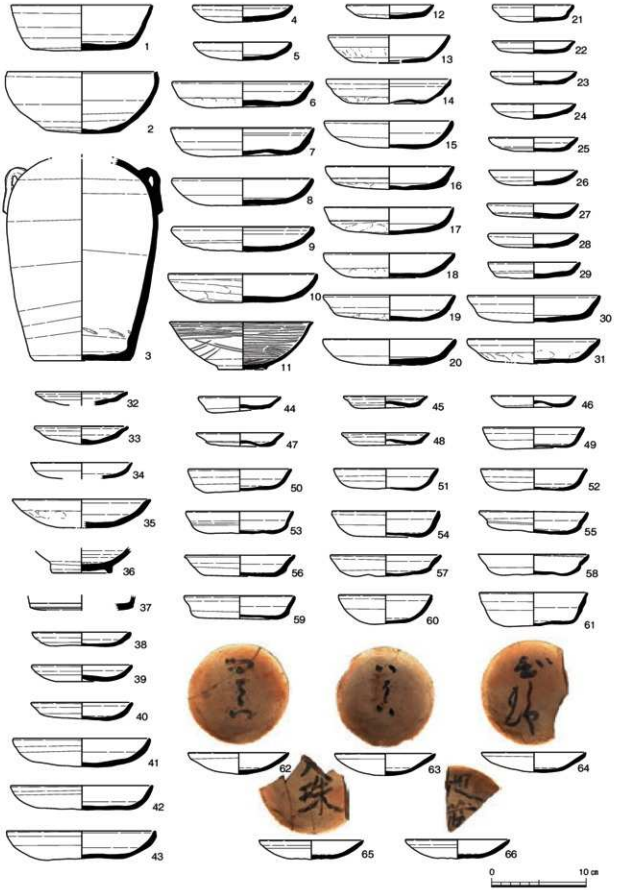
土器溜SU10446　ほぼ完形の土師器皿（4～10）多数に、少数の瓦器椀(11)がともなう。土師器皿は、口径15㎝前後と口径10㎝強の大小2群があり、量的には大皿が多い。大皿（6～10）は、口縁部外面に2段にわたってナデ調整が施されているのに対して、小皿（4・5）はナデ調整が一段しか施されておらず、灯明皿として用いられた痕跡の認められるものもある。10の大皿は、底裏および周辺にヘラ削りが施されている点で特異。伴出の瓦器椀は、薄手化している点に川越俊一氏の分類（川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』同朋舎出版、1983）による第Ⅲ段階以降の特徴を見出すことができるが、口径は約15㎝と大きめで、第Ⅲ段階A型式でも古相を示す。土師器皿と瓦器椀の特徴から、12世紀後半頃のものと考えられる。

土器溜SU10442　ほぼ完形の土師器皿（12～20）が多数出土した。胎土は橙褐色で、口径14㎝前後の大皿（13～20）が多いが、口径9㎝強の小皿（12）を少量含む。いずれも口縁部に一段のナデ調整が施されている。調整手法と口径分布から、13世紀前半頃のものと考えられる。

土器溜SU10443　土器溜SU10442と同様に、胎土が橙褐色の土師器皿（21～31）がほぼ完全な状態でまとまって出土した。形質的特徴の共通性から、SU10442出土品とほぼ同時期のものと考えられるが、大皿（30・31）よりも小皿（21～29）が多い点で異なる。

土坑SK10620　土師器皿（32～35）のほか、白色土器の椀（36）と緑釉陶器の小片（37）が出土した。土師器皿には、口縁部が「て」の字状とも形容される独特の形状を呈する一群（32・33）と、外反する一群（34・35）があり、後者には口径15㎝前後の大皿（35）と口径11㎝前後の小皿（34）が認められる。緑釉陶器(37)は器形を特定することが難しいが、内面が二次的に被熱しているように見受けられ、香炉の体部ではないかと推定される。土師器皿の形態的特徴から、11世紀末ないし12世紀初頭頃の遺物群と考えられる。

土坑SK10605　土師器皿（38～43）を主体とするが、少量の瓦器椀・皿をともなう。土師器皿は、基本的に口縁部に二段のナデ調整が施されているもので、口径15㎝前後と口径11㎝弱の大小2群に法量分化する。SK10620出土品と比べると、概して口縁部が内彎する傾向にあり、後出的要素が強く認められるが、外反する口縁部を有する個体も少数含まれている。12世紀前半頃のものと考えられる。



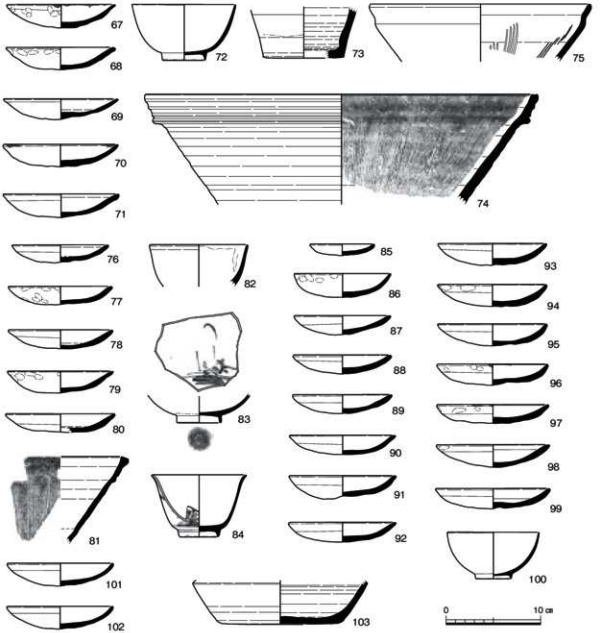
第32図　西室出土土器（1）　1：4

円形土坑SK10600　南都（奈良）の中世土師器に特徴的な、赤褐色の胎土を有する皿（44～61）がまとまって出土した。径高指数（口径÷器高×100）25未満の浅手の一群（44～59）と、径高指数30前後の深手の一群（60・61）に大別でき、浅手の一群は口径９㎝前後と口径12㎝前後の大小２群に法量分化する。深手の一群にも口径10㎝前後の小型品（60）と、口径12㎝弱の大型品（61）があるが、浅手の一群と比べて極端に個体数が少ない。胎土の上で顕著な違いは認められず、いずれも口縁部外面に１段もしくは２段のナデ調整が施されている点で共通するが、深手の一群は全般的に丁寧に作られている。暦年代推定の材料となる共伴遺物を欠くが、土師器皿の様相が近似する奈良市教育委員会平城京第559次調査SK638・639出土品（奈良市教育委員会「南都出土中近世土器資料集―奈良市高天町遺跡（HJ第559次調査）出土資料―」、2014）の中に、京都近郊産と目される土師器皿がともなっていることが手がかりとなる。SK638・639出土の京都近郊産土師器皿は、貞和元年（1345）に光明天皇から寺地を賜り、京都六条堀川に創建された本國寺の造営に際して埋められたと考えられる楊梅小路南側溝出土品（京都市埋蔵文化財研究所「平安京左京六条二坊五町・猪熊殿跡・本國寺跡」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』、2012）との類似性が高く、概ね14世紀前半のものと考えられるので、SK10600出土土器についても、ほぼ同時期のものと考えることが許されよう。

土坑SK10613　口径11㎝前後の土師器皿（62～66）がまとまって出土した。元和年間（1615～24）頃の陶磁器が共伴した興福寺旧境内（平城第539次）SK10547出土品（石田由紀子ほか「興福寺旧境内の調査―第539次」『奈良文化財研究所紀要2015』、2015）と胎土・成形手法が比較的似ているが、口径が若干縮小している点でやや新しいと考えられ、17世紀でも半ばから後半頃のものと推定される。内面に、「み はい」（62）「いはい」（63）「びしゃもん」（64）「文珠」（65）「地蔵」（66）といった墨書の認められるものを含む。墨書の内容からみて、仏事に使用されたものであろう。

方形土坑SK10630　４層に分かれる埋土のうち、ほとんど遺物を含まない③層を挟んで、下層の④層と上層の①・②層からの出土があり、複数個体で破片の直接接合が確認できた①・②層出土品については一括する（埋土名称は第17図参照）。④層出土品には、土師器皿（第33図67～71）、肥前地域産の白磁碗（72）、鉄釉壺（73）、信楽焼の擂鉢（74）、瓦器擂鉢（75）があり、①・②層出土品には、土師器皿（76～80）、信楽焼の擂鉢（81）、肥前内野山窯系の緑釉陶器碗（82）、高台内に「冨永」の印銘をもつ京焼風の肥前陶器碗（83）、肥前磁器の染付碗（84）などがある。67・70は灯明皿として用いられたらしく、口縁部に煤が付着している。①・②層出土の土師器皿は、口径がわずかに小型化している点に④層出土品よりも年代的に後出する要素を見いだすこともできないではないが、共伴した陶磁器に際立った年代差は認められない。①・②層から出土した信楽焼擂鉢（81）、肥前地域産の施釉陶器碗（82・83）といった国産施釉陶器類は、宝永５年（1708）の大火にともなう整地層に覆われていた平安京左京北辺四坊穴蔵F1387出土品（京都市埋蔵文化財研究所「平安京左京北辺四坊」、2004）と高い共通性を示しており、18世紀初頭頃のものと考えられる。なお、貼床下や重複（先行）する２基の方形土坑からも大量の土師器皿が出土しているが、形質的にSK10630の埋土出土品との間に顕著な差異は認められない。

土坑SK10634　ほとんどが土師器皿（85～99）で占められているが、肥前地域産の白磁碗（100）などをわずかにともなう。土師器皿の胎土は、概して緻密で、淡い黄橙褐色を呈するものが多い。法量的には、口径７㎝前後の小皿（85）、口径10.5㎝前後の中皿（86～93）、口径12㎝前後の大皿（93～99）に３区分でき、大皿の口径は方形土坑SK10630の①・②層出土品に近似するが、口縁部内面に残るナデ痕跡の幅が極端に狭くなっている点に違いを見いだすことができる。伴出の白磁碗も、SK10630④



第33図　西室および北円堂院出土土器（2）　1：4

層出土品と較べて全体に浅手で、高台も低くなっているなど、伊万里焼と呼ばれる肥前地域産の磁器碗としては、18世紀半ば以降の特徴を示す。

竈SL10637　埋土から、ほぼ全形を復元しうる土師器皿（101・102）が２個体出土した。形質的には、土坑SK10634出土の大皿との共通性が高いが、いずれも口径11.3cmと小ぶりであることから、やや降る時期のものと考えられる。

ii．北円堂院の土器・陶磁器

Ⅲ区からは、整理用コンテナケースに30箱あまりの土器・陶磁器が出土した。瓦溜SX10659などから、中世に遡る土師器や瓦器の細片も出土しているが、江戸時代後期の土器・陶磁器が圧倒的に多数を占めており、特に土坑SK10651からの出土量が多い。SK10651からの出土品には、端反り碗など19

世紀第３四半期頃に位置付けられる国産磁器碗は少数しか認められないが、19世紀前半以前に遡ると考えられる肥前磁器碗・皿類や漆継ぎ補修痕をもつ器物がすこぶる多く含まれている。茶道具の水指や南紀男山焼の煎茶碗といった特徴的な遺物が目立つことからも、日常の雑廃棄物とは考えにくく、明治時代初期に廃仏毀釈に関連してまとめて投棄されたものとみられる。

Ⅳ区からは、整理用コンテナケースに２箱分の土器・陶磁器が出土したのみで、燈籠据付穴SP10671から出土した須恵器（第33図103）以外にめぼしい遺物はない。103は、頸部を欠いているが平瓶とみられ、肩部に強い屈曲をもつ独特の形状から、奈良時代のものと考えられる。　（尾野善裕）

（２）瓦磚類・土管

ｉ．西室出土瓦磚類および土管

西室の調査では古代から近代までの多くの瓦磚類が出土した（第３表）。軒瓦の出土量としては、中世のものがもっとも多く、次に平安時代、奈良時代と続く。奈良時代では軒丸瓦は6301Ａ、軒平瓦は6671Ａの出土が目立つ。6301Ａ-6671Ａは興福寺創建瓦であり、これらが創建西室所用の組合せである可能性が考えられるものの、奈良時代の軒瓦の型式はほかにもいくつか出土しており、断定はできない。また、平安時代以降の軒瓦も多数出土しているが、特定の型式には偏っておらず、西室で用いられた軒瓦の組合せは特定できなかった。以下、西室大房SB10450や掘立柱建物SB10440の年代を検討する上で重要と思われる軒瓦と土管について報告する。

軒瓦に関しては、遺構にともなうものと遺存状態の良いものを中心にあげた（第34図）。１・２は奈良時代の軒丸瓦。１は6301Ａで興福寺創建瓦。２は6308Ａａ。平城宮所用瓦だが、興福寺や西隆寺など寺院でも出土例がある。３～８は平安時代。３・５・６は複弁蓮華文軒丸瓦。３は中房周囲に蕊状の文様をもつ。６は外縁に鋸歯文と珠文をもつ。平安時代前期。４・７は単弁重弁蓮華文軒丸瓦。４は蓮弁の間に間弁をもつが、７は蓮弁のみで間弁をもたない。８は素弁蓮華文軒丸瓦。９・10は中世の「興福寺」銘軒丸

第３表　西室調査区（Ⅰ・Ⅱ区）出土瓦磚表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6234	Ab	1	6561	A	1	軒桟瓦（近世）	3
6235	F	1	6671	A	6	菊丸（近世）	3
6301	A	11		L	1	丸瓦（刻印）	26
	I	1		?	4	丸瓦（ヘラ書）	3
6307	J	1	6682	D	4	平瓦（刻印）	35
6308	Aa	1	6732	Fa	1	桟瓦（刻印）	1
奈良		4	6739	A	1	隅切平瓦	7
平安		21	6763	C	2	鬼瓦	1
古代		8	奈良		3	鬼瓦（平安）	3
鎌倉		2	平安		44	切熨斗瓦（古代）	3
巴（鎌倉）		23	古代		6	切熨斗瓦（中世）	2
室町		2	鎌倉		10	割熨斗瓦（中世）	1
巴（室町）		4	室町		6	熨斗瓦	3
中世		39	中世		47	面戸瓦	40
巴（中世）		92	近世		15	面戸瓦（古代）	5
巴（中近世）		9	時代不明		4	面戸瓦（中世）	3
近世		7				磚（線刻）	1
巴（近世）		15				雁振瓦	4
近代		1				伏間瓦	2
巴（近代）		1				鳥衾瓦	1
時代不明		9				棟飾？	1
						目板瓦	6
						隅木蓋	1
						瓦製円盤	2
						用途不明道具瓦	16
軒丸瓦計		253	軒平瓦計		155	土管	75

	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	レンガ
重量	6827kg	1325.8kg	196kg	140.0kg	0.4kg
点数	5292	15737	8	221	1

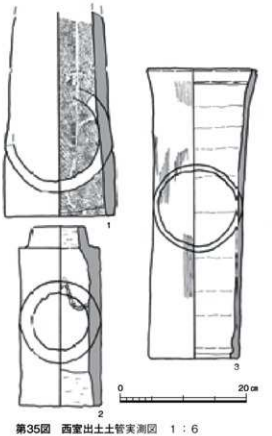
第４表　北円堂院調査区（Ⅲ・Ⅳ区）出土瓦磚表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	点数		型式	点数		種類	点数
平安	4		平安	3		軒桟瓦	11
中世	3		鎌倉	1		菊丸	5
巴（中世）	21		室町	2		丸瓦（刻印）	6
近世	7		中世	6		平瓦（刻印）	6
巴（近世）	46		近世	29		隅切平瓦	1
時代不明	6		時代不明	3		鬼瓦（中近世）	10
						切熨斗瓦（中世）	5
						割熨斗瓦（中近世）	5
						箱熨斗瓦	4
						伏間瓦	4
						雁振	7
						鳥衾	2
軒丸瓦計	87		軒平瓦計	44		目板瓦	14
						隅木蓋	5
						瓦製円盤	1
						用途不明道具瓦	11

	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩
	156.01kg	497.20kg	0.37kg	36.4kg
	468点	2074点	1	22

第34図　西室出土軒瓦拓本　1：4

瓦。９は鎌倉時代、10は瓦当中央に菊花文の刻印をもつことから室町時代のものである。11～14は左三巴文軒丸瓦。11・12には瓦当中心に珠点がある。平安時代末から鎌倉時代。13・14は鎌倉時代、15は鎌倉時代から室町時代。16は鎌倉時代の右二巴文軒丸瓦。17・18は奈良時代の軒平瓦。17は興福寺創建瓦の6671Ａ。18は興福寺所用瓦の6682Ｄ。19～23は平安時代。19は外区に珠文をもつ唐草文軒平瓦。20は偏行唐草文軒平瓦で薬師寺や平等院で同范例がある（奈文研『薬師寺発掘調査報告』、1987）。21は中心飾りに四葉宝相華文をもつ重郭文軒平瓦。22は植物文軒平瓦。23は均整唐草文軒平瓦で中心飾りに菱形の文様をもつ。平安時代後期。24は鎌倉時代の「興福寺」銘軒平瓦。25は連珠文軒平瓦。鎌倉から室町時代。26～28は室町時代の均整唐草文軒平瓦で中心飾りに半裁した菊花文をおく。



第35図　西室出土土管実測図　１：６

出土地点に関しては、３～５、12～14、20が西室大房SB10450の礎石抜取穴から出土した。SB10450礎石抜取穴からはここにあげたほかに軒瓦の小片が出土しているが、すべて奈良時代から鎌倉時代にかけてのものである。また、掘立柱建物SB10440抜取穴からは16、土管暗渠SD10430からは25、同じくSD10430の土管抜取溝からは15が出土した。その他の遺構としては、２・６・17が土坑SK10621、９がSK10614、22・26が方形土坑SK10630、23が土坑SK10618、24が竈SL10638（竈内廃棄）、27が南北溝SD10434、28が土坑SK10439から出土した。それ以外は、８・11が中世以降の整地土から出土したほかは、すべて包含層もしくは表土から出土したものである。

次に、土管について述べる。西室では土管を用いた暗渠を複数検出した。土管は遺構ごとに異なった形態をもつ（第35図）。１は行基式丸瓦円筒土管（以下、行基土管）。粘土板を模骨に巻き付けて製作しており内面の布目は粗く、吊り紐はない。平安時代以前とみられる。土管暗渠SD10438出土。ほかにも行基土管は土管暗渠SD10435・10436で用いられる。２は玉縁式丸瓦円筒土管（以下、玉縁土管）。広端部内面を約５㎝の幅で大きく削り、土管が連結しやすいようにする。内面には吊り紐痕が残り、吊り紐痕が布袋内面に通し縫いされていること、吊り紐の内外の比率が、１：５～１：７であることから14世紀中頃から後半のものであろう（山崎信二『中世瓦の研究』奈文研、2000）。このほかにも玉縁土管としては内面の吊り紐痕が玉縁部と胴部の２ヶ所あり、狭端内面を段状に削るものがある。２と同時期と考えられる。３は片側がソケット状の継ぎ手をもつ土管（以下、ソケット土管）で、丸瓦円筒を転用したものではなく、専用の土管である。粘土紐を巻き上げて作られており、外面にはカキ目をもつ。奈良市古市城で出土した16世紀の土管と形態や製作技法が類似しており、これと近い時期のものと思われる（奈良市教育委員会「古市城の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』、1989）。２・３は土管暗渠SD10430出土。SD10430では、玉縁土管とソケット土管とを混用しているが、玉縁土管列の中にソケット土管が部分的に入っており、後者が後世の補修とわかる。ほかにも土管暗渠SD10431には玉縁

第36図　北円堂院出土軒瓦　1：4

土管が、土管暗渠SD10432にはソケット土管が用いられていた。またSD10430・10431・10432には土管保護のために上面に丸瓦や平瓦が乗せられていた。これらの一部には室町時代の瓦の特徴である菱形や円形、菊花形の刻印が確認でき、掘立柱建物SB10440の廃絶年代を考える上で重要である。

ii．北円堂院出土瓦磚類

北円堂院から出土した瓦磚類は第４表のとおりである。ほとんどが近世から近代にかけてのもので、古代のものはわずかである。特に土坑SK10651、SK10656からは近世から近代までの瓦が数多く出土した。

第36図１は素弁蓮華文軒丸瓦で平安時代。２は単弁八弁蓮華文軒丸瓦。平安時代後期。３は興福寺一乗院所用の一乗院章文で江戸時代初期のものである。４は十六弁菊文軒丸瓦。江戸時代。５は左三巴文軒丸瓦。内区の巴文が非常に細く、外区の珠文も小さい。６は右三巴文軒丸瓦。５・６ともに江戸時代。７は均整唐草文軒平瓦。東大寺式に似た文様構成をもつ。平安時代初期。８は興福寺銘文軒平瓦。西室で出土した第36図24に似るが、外区の珠文が小さい。鎌倉時代か。９は菊花唐草文軒平瓦。10は菊水文軒平瓦。９・10は室町時代。１が北面回廊基壇土にのる包含層、２が整地土。３・５・６・８・９がSK10656、４がSK10651、７がSK10656の上にのる黒色土より出土した。　（石田由紀子）

（３）金属製品・銭貨

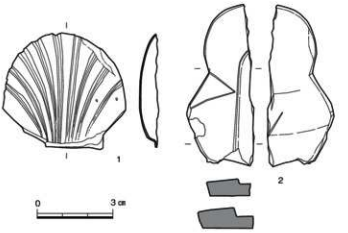
ｉ．西室出土金属製品・銭貨

鉄釘が103点、鉄鏃５点、鉄刀片２点などが出土した。鉄釘には、丸釘・角釘の両方を含む。角釘には方頭釘が３点みられるが、その他はほとんどが小片で頭部形状がわかるものはほとんどない。遺構に関わるものとして、土坑SK10618から鉄角釘２点、土坑SK10621から鉄角釘２点、円形土坑

SK10600から鉄角釘１点、SK10630から鉄角釘２点、鉄丸釘10点、SK10632から鉄角釘11点、鉄丸釘２点がある。鉄鏃は、表土からではあるが完形品が出土しており、長さ14.2㎝、幅4.1㎝。

また、Ⅱ区の基盤層上位の包含層からの出土ではあるが、銅製の垂木先金具片と思われる板状品が１点出土した。長さ約３㎝程度で、全体形状は不明である。

銭貨では、SB10450の礎石（ニ十一）の周辺で寛永通寶６点と北宋銭（崇寧通寶）１点が出土した。



第37図　出土金属製品・石製品　２：３

ⅱ．北円堂院出土金属製品・銭貨

近世土坑群から鉄釘などが多量に出土した。遺構に関わるものとして、SK10651からは銅キセル雁首１点、青銅製貝杓子１点、鉄角釘４点が、SK10656からは鉄角釘28点、鉄丸釘３点、鉄鏃５点、鉄座金11点がある。第37図１は、貝杓子である。厚さ0.5㎜の銅板を用いて、イタヤガイ科の貝殻を模して作られたものと考えられる。中央右よりに柄の緊縛用と見られる0.5㎜の小孔を２つ穿つ。縦4.6㎝、横5.0㎝。貝杓子には貝殻をそのままを用いるものと金属製とするものの２種があり、銅製のものの類例として、東京都汐留遺跡（東京都生涯学習文化財団編『汐留遺跡Ⅱ』東京都埋蔵文化財センター、2000）がある（これが貝柄杓であることとその類例については、國學院大學の阿部常樹氏よりご教示いただいた）。このほかに鉄角釘３点、鉄丸釘25点が出土した。いずれも表土あるいは攪乱からの出土である。

銭貨では、近世土坑群から延喜通寶１点、寛永通寶３点、琉球銭（世高通寶）１点が出土した。また、近世土坑群の上にのる黒色土から一銭銅貨（大正11年、1922）が出土した。

（４）冶金関連遺物

Ⅰ区の土坑SK 10453 からは、鋳型片、銅取瓶片、銅滓、粒状滓、鍛造剥片などが出土した。これらの大部分は、埋土の水洗選別によって検出したもので、いずれも小片である。この周辺では表土からではあるが、坩堝片が出土した。また、Ⅱ区の土坑SK10613やSK10621からは褐色鉄滓片やガラス質鉄滓片が出土した。前章で述べたようにⅠ区東南付近では、西室大房再建に関わる、鉄鍛冶や鋳銅などの金属生産活動がおこなわれていたと考えられる。

（５）石製品

１・Ⅱ区からは砥石片、石硯片、滑石製石鍋片（底部片）などが出土した。砥石はいずれも小片で、表土、包含層からの出土である。第37図２は石硯。粘板岩製で、上側辺部分が残存し墨堂の一部が認められる。下方に向かって厚みを増す。側縁部は連弧状に整形する。表面には墨痕が残る。西室大房SB 10450 南妻中央の「ハ一」礎石抜取穴出土。（芝）

（6）動物遺存体

Ⅲ区で検出した土坑SK10651やそれを覆う黒色土から、57点の動物遺存体が出土した（第38図、第5表）。土坑SK10651からは、マシジミ、アカガイ、ハマグリ、アワビ属、バイなどの貝類やマダイの歯骨、種は不明であるが鳥類の上腕骨が出土した。黒色土からもハマグリ、アカガイ、マシジミ、クロアワビ、アワビ属などが出土している。出土した動物遺存体は食用となる種ばかりで、鳥類の上腕骨には解体痕跡も多数認められたことから、食糧残滓と考えられる。貝類は大型個体が多いことが特徴的であり、殻長12.1cmのアカガイや殻長13.5cmのクロアワビも認められた。マシジミ、ハマグリ、アカガイは貝合わせができる個体も多く認められ、廃棄単位の保存性が高いことが示唆される。また、土坑SK10651と黒色土の動物遺存体は平面的に同じような場所から出土しており、様相も共通することから、同じ遺構に由来した資料群の可能性がある。

土坑SK6051は、北円堂院の北面回廊基壇を壊して掘られており、土器など遺物の様相から、19世紀第3四半期の廃仏毀釈にともなった廃棄物と考えられる。この頃の興福寺には、興福寺の僧侶だけでなく、明治政府の役人や藩兵も駐屯していた。例えば、明治維新期の興福寺僧・宗円の日記によると、興福寺境内の事例ではないが、慶応4年（明治元年、1868）8月17日の奈良府判事の新任歓待には、小鯛塩焼姿、はも、味噌汁などが夕飯に出されている（奈文研歴史研究室の吉川聡氏よりご教示いただいた。吉川聡『東大寺図書館所蔵 中村純一寄贈文書調査報告書』、2014）。今回出土した動物遺存体は、こうした廃仏毀釈の混乱の中で廃棄された食料残滓であり、当時の状況を物語る貴重な資料といえる。

（山崎　健）

第38図　Ⅲ区出土貝類

第5表　Ⅲ区出土動物遺存体一覧表

種名・部位名	土坑SK10651（左／右）	黒色土（左／右）
クロアワビ	0	1
アワビ属	1	1
バイ	1	0
巻貝種不明	1	0
アカガイ	3／3	6／2
マシジミ	6／7	2／1
シジミ科	3／0	0／2
ハマグリ	3／2	7／3
マダイ　歯骨	0／1	0
鳥類種不明　上腕骨骨幹部	1	0

5　結　語

（1）西室の調査成果

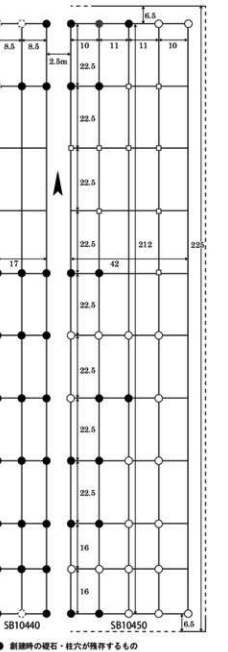
i．西室の造営と建築

西室大房SB10450の建物規模と基壇の南北規模が確定　西室大房は、桁行10間、約62.5m（212尺）、梁行４間、約12.4m（42尺）の南北棟礎石建物である（第39図）。梁行の柱間寸法は、中央２間が約3.2m（11尺）で両端間が約3.0m（10尺）、桁行の柱間寸法は、南２間が約4.8m（16尺）で、それ以北が約6.6m（22.5尺）である。基壇規模は南北が約66.5m（225尺）で、基壇の出は南北それぞれ約1.9m（6.5尺）である。基壇の東西規模は明確ではないが、東南隅の様相から東面の基壇の出も、約1.9m（6.5尺）であると考えられる。基壇西面は、当初から存在しなかったのか後世に失われたのか、今回の調査では不明である。基壇の北面、南面、東面の一部では基壇外装の地覆石と羽目石が遺存しており、これらにはすべて二上山産凝灰岩を利用している。これらから、基壇高は約40cmに復元できる。また、南面のみに雨落溝と考えられる石組溝を確認した。

今回の調査で得られた上記の西室大房の建物規模は、従来の復元案とは異なる。第２章（５頁）で述べたように、復元案には大岡案と鈴木案があり、梁行は４間、総長45尺は両案が一致するが、桁行については、大岡案は９間、22.5尺等間（総長202.5尺）、鈴木案は11間のうち北６間を22.5尺、南５間を15尺（総長210尺）としていた。両者は『流記』の記述や地表面に露出した礎石の位置等を根拠としている。今回の発掘調査により、梁行は４間で同じだが、総長42尺で既復元案よりもやや短く、桁行は、柱間数・柱間寸法とも既復元案とは異なる部分も多いことが判明した。また、礎石位置を改変した痕跡は確認できず、再建に際しても、創建以来の建物規模を踏襲していたと考えられる。ただし、この場合、『流記』に記された建物規模とは一致しない点が問題となる。

小子房の可能性がある掘立柱建物SB10440を確認

西室大房SB10450の西側に並列して、古代に遡る建物SB10440を確認した。桁行10間、梁行２間の南北棟掘立柱建物で、桁行の柱間寸法を大房と揃える。建物の位置や規模から大房と対をなす小子房の可能性があるが、これを小子房とするには、大房との関係から次の問題がある。



第39図　西室建物の柱位置と柱間寸法

西室大房と掘立柱建物SB10440の関係　まず、大房SB 10450 と掘立柱建物SB 10440の間は、側柱の心心間距離で約2.5m と狭く、両者が併存した場合、軒が干渉するか上下に重なることになる。西室大房と小子房の両方が描かれる絵画資料には、鎌倉時代後期の「興福寺堂舎図」（氷室神社蔵）や、室町時代の「春日社寺曼荼羅」（興福寺蔵）（第40図）等があるが、いずれも両者の間には３、４間の繋廊が描かれており、今回検出した建物配置とは異なる。古代の大房と小子房のあり方については、現存する法隆寺東室と妻室、発掘調査で確認した薬師寺東西僧房の例があり、大房と小子房は一定の距離をおいて並立する、絵画資料にみられるような形態と考えられている。今回検出した形態を大房と小子房とするには、建築史的にはさらなる検討が必要である。

ところで、興福寺の僧房については、三面僧房の１つである中室小子房の調査成果が参考になる（『興福寺食堂発掘調査報告』奈文研、1959）。そこでは、小子房の基壇外装が検出されており、礎石の痕跡は削平により確認されていないものの、掘立柱建物はみつかっていない。中室と西室は講堂を挟んで対になる僧房であり、小子房の仕様が大房と大きく異なっていたとは考えにくい。

このように、掘立柱建物SB10440を小子房とは断定できない。ただしSB10440が小子房ではないとしても、大房と柱筋を揃えたきわめて密接な関係がうかがえるのであり、古代の僧房を考える上で、重要な事例になることは間違いない。SB10440については、礎石建物SB10450に先行する建物という可能性もあり、興福寺をはじめとする古代寺院の発掘調査や諸資料の調査の進展をまちたい。

ⅱ．西室の再建と廃絶

西室大房の再建と廃絶　諸史料によれば、西室は８度焼失し７度再建された。上述のとおり再建にあたっては、基本的には創建時の規模を踏襲している。ただし、一部の礎石や基壇外装については位置を踏襲しつつ据え替えている。北面の基壇外側には焼土層が複数確認でき、西室と北室の間は再建にともない整地によって地表面がかさ上げされた可能性がある。また、再建に際しては、時期の特定は困難ながら、鉄鍛冶あるいは鋳銅等の小規模な金属生産がおこなわれていた。西室大房の廃絶は、基壇外装を壊す遺構の年代が18世紀前半以降に下るため、史料の記述と矛盾はなく、享保２年（1717）の火災まで存続したと考えられる。

掘立柱建物SB10440の廃絶　７度再建された大房に対して、SB10440の掘立柱建物としての再建はない。ただし、柱穴埋土の最上層に土器溜がみられる箇所がいくつかあり、礎石建物として再建された可能性は否定できない。

第40図　春日社寺曼荼羅図（部分、興福寺蔵）

廃絶に関しては、SB10440の柱穴を壊す土管暗渠や、土器溜や廃棄土坑の年代が参考になる。まず、土管暗渠の敷設は少なくとも２時期に区分できる。SD 10435・10436・10437（土管暗渠Ａ群）が古く、SD10430・10431・10432（土管暗渠Ｂ群）が新しい。Ａ群は、SB 10440 と重複するが、柱穴との重複関係はない。Ｂ群は柱穴との重複関係をもち、SB 10440 廃絶後に敷設したことが明らかである。次に、SB10440の柱穴を壊す土器溜SU 10442・10443 の年代は13世紀ごろに、廃棄土坑

SK10605出土土器の年代は12世紀前半頃に位置づけられる。このため、SB10440は遅くとも12世紀前半頃に廃絶していたと考えられる。したがって、平安時代以前に位置づけられる行基式の土管暗渠A群は、SB10440と併存していた可能性がある。

iii．その他の遺構の様相

近世遺構群の確認　西室大房SB10450の廃絶と前後して、西室北部周辺では方形土坑や竈群、埋甕などの施設群がつくられる。方形土坑には貼床が認められるものがあり、貯蔵施設等の性格が考えられる。ただし、現在のところ文献史料や絵画資料にこれらをうかがわせるものはなく、恒常的な施設とは考えにくい。これらの遺構群からの出土土器は、おおむね18世紀以降のものであるが、方形土坑SK10630の出土土器の年代観からは、その構築が西室大房の廃絶を遡る可能性がある。この場合、大房との機能的な関係が問題となるが、現状では不明である。いずれにしても、こうした近世の遺構がまとまって検出されたことはなく、享保焼失以後の興福寺境内の実態を知る上で貴重な成果である。

（2）北円堂院の調査成果

北円堂周辺の造成過程が判明　北面回廊の基壇の造成は、Ⅲ区の東半では地山削り出しでおこなわれるのに対して、西半では比較的厚い暗褐色粘質土による造成土を数層積んだ後、黄褐色粘質土と砂質土の互層からなる基壇土を版築によって築成している。この造成土・基壇土ともに遺物を含まないことから、少なくとも回廊建立時、すなわち北円堂創建時に遡る可能性が大きい。造成土がのる基盤層は、北円堂基壇のやや東で落ち込み、ちょうど現在の北円堂が建つあたりを境に、その西側（および北側）の原地形は崖のような様相を呈していたと推察される。北円堂院、特にその西面・北面回廊が、大規模な造成によって平坦面を形成した上に建造されたことになる。これは藤原不比等を供養するための北円堂の創建とその立地を考える上で、重要な事実である。なお、北面回廊の規模については、Ⅲ区では後世の遺構群やカシの大樹等で壊されており、不明といわざるをえない。一部残存していた礎石の抜取穴等のわずかな痕跡は、従来の想定案を支持している。

北円堂南面に燈籠基礎据付穴を確認　北円堂の南面で、燈籠基礎据付穴とみられる玉石を充填した小土坑を３基検出した。これらは既存の史料等では知られていない。中央のSP10671は北円堂のおよそ中軸線上に位置し、南面階段の南端から約3.2m、現在の北円堂基壇から約4.6mを測る。このそれぞれ東西1.4mの位置に２基（SP10672・10673）を配する。２基の幅は現状の北円堂南面階段の幅におよそ合う。３基は東西に一直線に並ぶが、SP10671がやや大きい。SP10671からは奈良時代の平瓶が出土しており、古代に属すると考えられるが、東西の２基からは遺物が出土しておらず年代は不明である。古代寺院の燈籠は、建物の中軸線上に１基配されるのが基本であり（蓮沼麻衣子「西隆寺伽藍」「西隆寺跡発掘調査報告書」、奈良市教育委員会、1999）、中軸線を挟んで燈籠を２基設けるようになるのは桃山時代以後とされる（川勝政太郎「燈籠の鑑賞」『燈籠』集英社、1973）。したがって、今回据付穴を確認した３基の燈籠についても、まず中央の１基が設置され、その廃絶後に、基壇南面からの位置を踏襲して新たに２基を建てたと推測される。

北面回廊基壇北側の土坑群の確認　北面回廊の基壇北辺は、近世以降の土坑群によって大きく削平されている。これらの土坑群からは、陶磁器や瓦のほか、食料残滓と考えられる動物遺存体が出土した。陶磁器の廃棄は19世紀第３四半期に位置づけられ、基壇削平の機会が明治期の廃仏毀釈に関わると考えられる。食料残滓等もこの混乱の中で生じた産物である可能性が高い。　（芝・箱崎和久）

報告書抄録

ふりがな	こうふくじ　だいいっきけいだいせいびじぎょうにともなうはっくつちょうさがいほうなな
書名	興福寺　第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅶ
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	芝康次郎・山本祥隆・番　光・尾野善裕・石田由紀子・山崎 健・箱崎和久
編集機関	独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所
所在地	〒630-8577　奈良県奈良市佐紀町247-1　　Tel　0742-30-6753
発行者	興福寺
所在地	〒630-8213　奈良県奈良市登大路町48番地　　Tel　0742-22-7755
発行年月	西暦　2016年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
興福寺（こうふくじ）	奈良県奈良市（ならけんならし） 登大路町（のぼりおおじちょう）	29201	―	34度 40分 48秒	135度 51分 46秒	2013.6.3 ～ 2013.10.11 2014.9.29 ～ 2015.1.16	1,436	境内整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
興福寺	寺院	奈良時代 ～ 明治時代	西室基壇 礎石建物 掘立柱建物 北円堂院北面回廊 北円堂院燈籠基礎	土器 瓦 金属製品 銭貨 石製品 冶金関連遺物 動物遺存体	・西室大房の建物規模、基壇南北規模が判明した。 ・大房に隣接して小子房の可能性がある掘立柱建物を検出した。 ・北円堂周辺の造営過程を明らかにした。 ・北円堂南面に燈籠の基礎据付穴を検出した。

2016年３月30日　印刷
2016年３月31日　発行

興　福　寺

第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅶ

編　集　独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所
発　行　興　福　寺
〒630-8213　奈良市登大路町48番地
印　刷　能登印刷株式会社